



マッセ・市民セミナー（ちやいんどネット大阪・マッセOSAKA共催講座）（泉州ブロック）
「保護者との良い関係づくり」

柴田 愛子 氏
（りんごの木）

1. 子どもを取り巻く環境、育て方の変化

今日の話は、保護者との付き合い方についてです。私は最初、幼稚園に勤めていました。正しい幼児教育をすればきちんとした子どもが育つだろうと思って、その正しいとは何なのかなと思って、一生懸命勉強しました。ところが、色々な考え、色々なやり方があり過ぎて、正しいものがどれか分からず、「私はどうすればいいの？」と、どんどん苦しくなってしまうと、5年で辞めたのです。それで、こんな何が正しいのかが分からない世界からは足を洗おうと思ってOLをやったのですが、OLには飽きてしまいました。やっぱり子どもは面白いと思って、今度は障がいのある子も含めた保育に入りました。そこまでまた5年で、通算すると10年間、私なりに講演会へ行ったり、勉強したり、資料を集めたり、色々なことをして、正しい幼児教育、正しい子育て、正しい保育を探ったのですが、自分の中で正解は存在しないのではないかと思うようになりました。こうすればこう育つ、 $1 + 1 = 2$ みたいな方程式は、人の子の育ちには無いのではないかと思ったのです。正しいと言われているものは時代によって大きく変わります。子どもの生まれ方は変わらないけれど、子どもを取り巻く環境はものすごく変わってきていると思います。

40年もあれば正反対ぐらいに変わっていくと思います。40年ほど前に生まれた赤ちゃんは、まず産湯に浸からせるのが通常の習わしでした。産湯なんて知らないでしょう？その言葉はもう死語になっています。時代劇で、赤ちゃんが生まれるというと、「お湯を沸かせ」というシーンを見たことが無いですか。たらいにお湯を入れて赤ちゃんを洗うのですが、そのお湯を産湯と言います。ところが今はそうではなくて、生まれたら布で拭うようになりました。お湯に一気に浸けると、赤ちゃんの体温が一気に下がって良くないとされたのです。

また、40～50年前は母乳が出て、ミルクの方が栄養のバランスが取れて良



いとされた時代です。ミルクを飲ませると頭が良くなると言われたのです。それから、嘘みたいな話ですが、味の素をふりかけると頭が良くなるという、おまじないのように変なものが信じられていて、味噌汁にまで味の素を入れたのです。それが今では、ミルクよりも出来れば母乳の方が良いと言われています。逆に母乳信仰が厚過ぎて、おっぱいが出ないだけで子育て失格と言われているような気がするという時代になっています。更に母乳を搾って冷凍して持ってきて、保育園で解凍して与えるということも一般化されました。たくさん出る人と、あまり出ない人がいるので、母乳バンクというところに母乳を預けて、足りない人がそこからもらうというシステムまでできています。

すごく変わったものとして、昔は赤ちゃんにあせもが出来ないように、お風呂から上がった後やプール遊びをした後にベビーパウダーやシッカロールの白い粉を付けて、オムツを替えた後もおしりを真っ白にしていました。それが今は全く使わなくなりました。それは粉が汗腺を詰まらせるから良くないとされたためです。

このように、かつては勧められたことが今は変わっている例がたくさんあります。かつては、「泣いていちいち抱くと抱き癖がつくから放っておけ」、今は、「泣いたらサインなのでちゃんと応えてあげましょう」。かつては、「添い寝をすると自立心を阻むから添い寝はやめましょう」、今は、「添い寝をして安心して寝かせてあげましょう」。かつては新生児は3時間置きに授乳ということがありましたが、今は無くなってきています。

でも、私はお風呂から上がって白い粉をパタパタとはたくのが好きです。お風呂から上がった時は汗っぽいので、そこに粉をはたくとサラサラになる気がするのです。今でもジョンソン&ジョンソンのベビーパウダーやあせ知らずという商品が売っていて、私はそれを60年ぐらい使っていますが何も問題ありません。このように、その時代の専門家に言われていることは、そうしなければ生きていけないというものでもないのです。時代によって考え方が違うというのは、もちろん行政や専門家が関わっていますが、その時代に多数派の人が支持していることが正しいかのように思えてしまうということだと思のです。だから、母乳の時代にミルクだと目立ってしまって、自分を責めてしまう。でも、みんながミルクだった時には母乳にこだわった人は少数派だった。その時代によって、多数派が支持することが正しいかのように思えるけれど、決して





そうしなければ子どもが生きていけないわけではないということです。時代によって随分変わります。もちろん、保育のやり方も、教育自体も随分変わってきていると思います。現在でも国によっても考え方が随分違います。

それから、専門家と言われる人にみんな弱いです。専門家に言われると、「そうなんだ」と割と無条件に思ってしまいがちです。一保育者だと、自分は障がいのある子どもの指導については素人だと思って、自分で判断するのは怖いから専門家の意見を聞きます。ところが、その専門家の意見も両極端ぐらいに違います。私が「りんごの木」をやっているのは横浜市ですが、横浜市は早期発見・早期治療で全国1番と言われています。それで早くから療育センターに行きます。でも、早期発見は良いけれども、早期治療というところに私は引っ掛かっています。発達支援と一括りに言っても、自閉は自閉で、アスペルガーはアスペルガーであって、その子たちは治るのか治らないのかという問題ではないと思うのです。その障がいのある子に対して、日常的な訓練のようなことをして、その他の人たちと融合してやっていけるように育てるという考えが、今のところ横浜市では完全にメインです。でも一方で、その子たちはその子たちの特性を持って生まれてきているのだから、周りに迷惑を掛けることがあっても、みんなで助け合っていけばいいではないかという考えと、主に二通りあると思うのです。大阪がどちらかは分かりません。

私たちは専門家に弱いのですが、専門家にも色々な考え方があります。その考え方を参考にしつつ、自分と目の前にいる子どもに適したやり方を考えていけばいいと思うのです。専門家に言われたことを無条件に受け止めて、保育の中に入れるのは大変困難なことではないかと思います。障がいの特性を考えると、集団保育を考えていくというのは随分矛盾する部分があると思います。それはまた後で触れます。

2. 個人差を認められず、平均値を気にする

時代によっても専門家によっても違うということと、もう一つ、発達理論や発達のものさしが、保育者にも保護者にもきちんと入り過ぎているということがあります。何歳は何が出来るはずというのはあくまでも平均値で、それより早い子もいるし、それより遅い子もいるわけです。でも、その平均値のものさしで、どうしても目の前の子どもを測ってしまいがちです。そうすると、早い、

普通、遅いという「評価」になってしまうのです。その評価を今や日本の子どもは0歳の時から受けているような気がします。

例えば、この間も1歳9か月になったけれど歩かない子がいました。その子のお母さんは、三人目だからゆっくりでいいと思っていたのですが、検診で小児科の先生に「1歳9か月になっても歩かないのは脳に障がいがあるのではないか。脳と歩行とは連動していることがあるから、専門家の診断を受けた方がいい」と言われました。これは確かに嘘ではないのです。その専門家の診断は、MRIを撮った方がいいというもので、MRIを撮るには子どもが動いてしまうから、睡眠薬を飲ませるとい話になりました。

そのお母さんが私に「どうでしょうか」と聞くので、「それは嘘ではないけれど、私がこの子を見ている限り他はバランス良く育っているから、まだ待っていていい範疇ではないかしら」と言ったのです。ですが、親にすると専門家にそう言われてしまって、ドキドキしているのです。私は、「逆に睡眠薬で眠らせる方が、ちょっと問題のような気がするけれどね」と言ったのですが、そのお母さんは心配で療育センターに申し込みました。療育センターが混んでいたので予約が3か月先になり、あと3日で療育センターに連れていくという時に歩いたのです。

2歳でしゃべらないで連れてこられる子も山ほどいます。障がいがあるのだろうかと聞かれると分かりませんが、障がいか障がいでないか判断するのはまだ早いのではないかと思います。4歳に入ってくると、ほとんどの子は数か月でベラベラとしゃべるようになってくるのです。そのような中、ずっとしゃべらないとご両親が泣きながら連れてきた子がいました。その子はどう見ても普通の子なのです。口周りの筋力や口の中に支障は無さそうだと思っていたのですが、その子が最初にしゃべったのが、お友達のところに行って「これ貸して」だったのです。だから、中身は十分熟しているけれども、現象的に遅いことがあると思います。ところが、その平均値がいつも親と保育者を脅かしているような気がするのです。

皆さんもよく耳になさると思いますが、日本の子どもは自己肯定感が低いと言われています。自分を自分で良しとする、「俺、案外いいやつなんだよ」と自分を肯定的に受け止めるということです。自尊感情とも言います。日本の子どもの自己肯定感が低い理由の一つは、独自の文化にあると思います。日本の



文化には謙遜の美德があります。子どもが元気に走っていると、「おたくのお子さんは元気ですね」「いや、体だけなんです」と言ってしまう。「こんにちは」「あら、お口がよく使えるのね」「口ばかりなんです」。日本は、褒められると、「そうでしょう」と言わない文化なのです。大人もそうです。「あら、このお洋服すてきね」「そうでしょう。私も気に入っているの」とはあまり言いません。「そうですか？安物なんです」と言ってしまうのです。その謙遜することに対する美德という文化が、自尊感情の低さとも比例しているのではないかと思います。

もう一つは、いつも平均値と比較して評価して子どもを育てていくことです。2年ぐらい前に、親御さんで寝返りを教えている人がいました。無理に寝返りさせると、うつ伏せから自分で仰向けに戻れないので危ないですよ。どうやっているのかと聞いたら、ひっくり返しているというのです。「寝返りは教えて出来るようになるものではないですよ」と言ったら、「だって、もうやっつい頃なのに何も動かないんです」と言うのです。平均値に合わせて、自分の子がまだやらなかったら、練習して教えて育てていくと思っている若いお父さん、お母さんたちがかなりの数いるということです。

私は、「次はハイハイを教えるわけ？ 次は歩くのを教えるわけ？ 言っておくけど、あなたは人間の子を産んだんでしょ？ だから人間の子に育つよ。何も教えないと犬の子になってしまうことはないんだから」と言うのです。そのくらい人間の子が人間として育つ能力を持っていることを信じられない、不安になってしまいます。それは過剰に色々な情報があるからだと思います。

3. 一人ひとりの子どもに寄り添う

そのように最初の10年の結論は、どうやら正しいものが無いということでした。その時に私が思ったことは、私が子どもが健やかに育ってほしいと願って勉強してきたことは、どれも大人の言い分だったということです。大人がどういう子に育ってほしいと願っているか。今、社会がどういう子に育ってほしいと願っているか。先生と言われる人たちが、どういう子を良い子、悪い子と評価するか。お父さん、お母さんたちが、どういう子に育ってほしいと願っているか。全部主役は大人なのです。大人がどう思っているか、社会がどう思っているかなのです。

その時に、「ちょっと待ってよ。子ども自身はどうなの？」と思いました。

子ども自身が感じていないのか、考えていないのか。子ども自身に育つ能力は無いのだろうか。私が知らなかったのは子どもだったということに気付いたのです。どう育ってほしいかではなく、どう育っているのかと、視点を子どもに変える。子どもを主役にして見ていく。子ども全般ではなく、何歳の子どもではなく、男の子、女の子ではなく、私の目の前にいる、「たっちゃん、どういう子?」「さっちゃん、どういう子?」「けんちゃん、どういう子?」。一人ひとりの子どもがどういう子かをもっとよく知りたいと思ったのです。

だって、嫌なことがあれば子どもは怒ると思っているでしょう。でも、嫌なことがあった時に泣く子もいるし、怒る子もいる。逆にピースマークをして、ヘラヘラする子もいます。よく「嫌なら嫌って言いなさい」と大人は言うけれど、嫌な時に「嫌」と言える子ばかりではないのです。だから、「この子は嫌って言う子よね。でも、この子は言えない子なのよね」と、一人ひとりをきちんとよく見てみようと思ったのです。子どもの内面を感じるために子どもの心に寄り添い、子ども一人ひとりをよく見るというのが私流の育て方です。

子どもの内面を子どもはどう感じているか、どうしたいのか、どんなつもりがあるのかというのを見るためには、「どうしたい?」と聞いても返ってこないのです。太古の時代から、赤ちゃんの生まれ方は変わっていません。こんなに時代が進んでも、「おはよう」と生まれてきた子はいないのです。みんな「オギャー」です。みんな言葉を持たずして生まれるのです。その後に言葉を学習して、言葉で表現出来るようになっていく。乳児を担当している方は、泣き方でお腹がすいたのか、オムツを替えてほしいのか、ああかかもしれない、こうかかもしれないと、色々思いを探るわけです。大人がこうかも、ああかもと探ろうとするのです。言葉をしゃべりはじめても、子どもは未熟だから何でも言葉で表現出来るようになっていくわけではありません。ところが、しゃべらなかった時は、「うん」と言うと、「ああ、喉が渇いちゃったの? お水をあげようね」と言ったのに、ひとたび言葉をしゃべるようになると、「うん」と言うと、「何、言わなきゃ分かんないでしょう」と言います。「お水、お水」と言うと、「お水じゃないでしょう。お水を下さいでしょ」と、正しい言い方を教えるようになります。この辺から、言葉に頼り過ぎて、子どもの心を見抜く勘が衰えてきているような気がするのです。

それで私は、子どもの様子を見て「こうかもしれない」「ああかもしれない」



と思うことを一言声に出して言うてみるようにしたのです。具体的に言うと、子どもが泣くとみんな「ああ、どうしたのかしら？」と思います。4～5歳の子が泣くと、大人はみんな「どうしたの？」と聞きます。泣いている子どもは「どうしたの？」と聞かれても「あのね」とは言いません。言葉で言えないから泣いているのです。そこに「どうしたの？ 泣いていちゃ分かりません。ちゃんと泣きやんで、お口で言うてごらん」と言っても、「うわーん。あのね、あのね、あのね…」【『あのね』ばかりじゃ分からない。だから、泣きやんでちゃんとお口で言いなさい。何のためにお口が付いているの。お口で言えるようになったら、先生聞いてあげるから」と偉そうに言います。子どもは嫌なことがあって泣いているのです。まず感情ありきなのです。その感情の表現方法として、赤ちゃんは泣いて生まれました。泣く、笑う、手足をバタバタする。感情の表現方法としては、そのように表情や身体を使つての表現は至ってストレートなのです。ところが言葉というのは、その後身に付いていくものだから、そうスムーズには出ない。ところが泣いていると、「どうしたの、言うてごらん」となります。

そうではなくて、私は泣いている子がいたら近づいていきます。怒って泣いているのか、悲しいことがあって泣いているのか、甘えているのか、それとも体調が悪いのか、大まかにこの四つは分かると思います。もし怒って泣いたら、「怒っているんだよね」という一言だけです。大人は、「何で怒っているの？」と聞きたいのです。いつも訳を知りたいのです。訳を知って、その不都合なことを取り除いてあげたいのです。でも、この子は泣いていて上手く説明出来ないのです。だから、怒って泣いていたとしたら、「怒っているんだよね」と、たった一言言つてあげます。そうすると、「分かってくれた」と思うのです。子どもは訳が分かってほしいのではなくて、気持ちを分かってほしいのです。人間、分かってくれる人がいると、感情が落ち着いてきます。感情が落ち着いてくると、今の自分の状況が頭で考えられるようになります。そうすると、次に口で「だってね」と出てきます。その「だってね」がすぐ出る子もいるし、なかなか出ない子もいますし、出さない子もいます。でも取りあえず、悲しそうに泣いていたなら「悲しいことがあったよね」と言う、「うん。あのね」と出てくるのです。子どもに寄り添うということは、子どもの内面に立ち入るのではなく、横で肩を寄せ合うとか、ぬくもりを伝わらせるということなの



です。

子どもたちは、友達が泣いていると黙って近づいて背中をさすります。あんなにくい慰め方を大人はしますか。大人は泣いていると「どうしたの?」と不安を全て口で解決しようとします。でも、子ども同士は「どうしたの?」と聞くのではなく、背中をなでているシーンをよく見ると思います。困った人がいる時は横に行ってあげる。そして、そこで寄り添ってあげる。でも、怒っているのか泣いているのか分からない時があります。分からない時は、私は隣に寄り添って、「嫌なことがあったみたいね」と言います。

いつも元気なアミちゃんという子が、朝に来たきりずっと膝を抱えて床に座っていました。何があったかは分からないけれど、いつものような元気が無いことだけは分かりました。その時のアミちゃんと私のやり取りはこうです。私「みんな遊んでいるね」アミちゃん「…おばあちゃんがね…」私「おばあちゃんが?」アミちゃん「おばあちゃんがね、うるさいの。ああしろ、こうしろって。おばあちゃん、怒ってばっかいるんだ」私「それじゃあ嫌になっちゃうね」アミちゃん「うん、そうでしょ。」そう言って遊びに行きました。お母さんにその話をすると、「あの子はそんな風に思っていたんですね」と驚かれました。

このように、子どもの心に寄り添って一言言ってみる。「嫌な時は嫌と言いなさい。」と言うのではないのです。こんなこともありました。ヒロ君はお友達とけんかをしていました。お友達はすごく怒っているのに、ヒロ君はピースサインでニヤニヤしているのです。私はそれを見て、周りの4歳の子どもたちに問いかけました。「ヒロ君はニヤニヤしているけど、ヒロ君がどう思っているのか分かる?」子どもたちは、「ヒロ君は『困ったな』と思っているんだよ。」と言うのです。ヒロ君もうなずいていました。そこで私は、「けんかをしたくないから困っているんだね。」と言いました。実は後で分かったのですが、彼が困った時や泣きたい時に泣かないでピースサインをする背景に、お父さんの暴力があったのです。お父さんから暴力を振るわれる時に、泣くともっとひどくなる。だから、何とか泣かないで、にこやかな顔を見せることがその子の習性になっていたと思うのです。このように子どもたちは、大人には分かりにくい色々な表現をしているのです。そこに寄り添うことによって、「この子はこんな時、こういう子なのね」と受け止めていけるようになるのです。





4. 子どもは自ら育つ力を持っている

私は子どもの心に寄り添ってやってみて、35年前にりんごの木をつくって、子どもをよく見る、子どものやりたいことをなるべく応援する、よほど危険だったり迷惑であったりしない限りは、「まあ、いいか」という保育をしてきました。それで私が今思っていることは、子どもは自ら育つ力を持っているということです。何歳にどういう指導をするではなくて、何歳はこんなことをやるから、そのことを援助してあげる。子どもは周囲の環境の中から、自分がやりたい、かっこいい、すごいと思うことを、いたずらと言われようと何と言われようと、取り込んで、夢中になって堪能すると卒業していきます。

例えば1歳ぐらいはスイッチに凝ると思います。手から指1本が動くようになったので、嬉しくて嬉しくて、スイッチを押しましょと誰も言わないのにむやみにスイッチを押し続けます。スマホも指で難なく操作します。挟むことが出来るようになったら今度はティッシュペーパーです。ティッシュペーパーに5歳が凝ることはないです。ほとんど1歳台です。5箱もやる子はいないです。大体2箱で卒業します。大人は「これはおもちゃではありません。」と嫌がりますが、子どもにとってはティッシュだろうと壁紙だろうと障子紙だろうと、それが目に入ると夢中になるのです。

それから、何でも投げる時期もあると思います。ピョンピョンする時もあると思います。何でも「駄目、駄目」と言う時もあります。その子のカリキュラムは、全てその子の中にあると私は思っています。今、保育は子どもの育ちを援助する仕事だと思っていて、「子どもは自ら育つ力を持っている」というのを私は確信しています。ただし、心が健康ならばです。心が健康ならば、前を向いてその子らしく歩いていけます。でも、心が不健康だとすごく不安で、「僕のこと誰か見てる？手放さないでね。ちゃんと守ってね。」となります。自分の命に危険があるとか、食べることに不安があるとか、色々な不安を抱えていると、本来の育ちどころではない状況です。心の健康は、何かあった時に寄り添ってくれる人が一人いれば、保障されているのだと思っています。

もっと具体的に言うと、子ども同士がけんかをして、「うわーん」と先生のところに帰って来た時に、解説してしまう先生がいます。泣きながら来た子どもに、「見ていたけど、あなたが、あの子のおもちゃを取ったでしょう。だからぶたれちゃったのね」と解説して、泣いて来た子が「それは僕は悪かったよ」

と言いますか。言わないですよ。解説を聞きたくて来ているのではなくて、嫌なことがあったから保護されたくて帰って来たのです。だから、「ああ、けんかになっちゃったね。痛かったね。」と抱いてあげれば良いと思います。そのまま泣き続ける子はまずいいです。ほとんどが2～3分で泣きやんで、おしりかきもぞぞして、また先ほどの子のところに帰っていく。何かがあった時に寄り添ってくれる人がいることで、本来の自分を取り戻せる。そして、自分から一歩外に出ていくことが出来ると思っているのです。

うちは小学校、中学校、高校で不登校になったり辞めたりした子も預かっています。その子たちに対してもそうです。「ああ、ご苦労さん。大変だったよね。苦しかったね。ここにいればいいよ。」と伝えます。そうすると本来の自分を取り戻して出ていきました。お母さんたちもそうです。お母さんたちも、取りあえず何があったか分からないけれど、先ほどの背中をさすのと同じで、「頑張ったね、辛かったね」と言うことで、本来の自分を取り戻す。人間はみんなそうなのだと私は思いました。皆さんもそうだと思うのです。日々保育でぐったり疲れているのに、更にこれもやらなくてはいけない、あれもやらなくていけないと色々言われると、「こんなに精いっぱいやっているのに、何なのよ」と頭にきます。「保育って、ひどい仕事だよ。大変な仕事だね。よく頑張っているね。」と言うと、「そうなのよ。そうは思わなかったよ。」と思いながら、元気が出てくるでしょう。それと同じです。寄り添ってくれる人がいることで、本来の自分を取り戻せるということに私は気付きました。

ここまで早口で来てしまったのは、私の保育の姿勢はそれが大前提だからです。人間をどうしなければいけないかとこねくり回すのではなくて、本来のその人、本来のその子を取りあえず、良いも悪いも評価無く、受け止めるということなのです。

5. 情報過多による混乱

話を戻しますと、時代の流れの中で、子どもは変わらないけれど環境は大きく変わりました。何日か前の新聞にも、「祖父母も学ぶ育児の新常識」という記事が出ていましたが、そのぐらい時代によって子育てが変わってきたということです。

ある時の地区センターでの話です。そこにはとても暗い顔をした人が居まし



た。私はその日、上手く話が出来ないほどその人のことが気になって、声を掛けてみたのです。

私 「あなた、何か苦しいのね。」

Aさん「そうなんです。産まなければ良かった。」

私 「えっ、そうなの？ どうしたの？」

Aさん「もう大変で大変で。」

Aさんは、少し鬱っぽくなっている様子でした。

私 「あなた、帰れるところはあるの？」

Aさん「この間まで実家に帰っていて、戻って来たのです。」

私 「夫は協力してくれるの？ ご飯はどうしているの？」

Aさん「夫はコンビニのお弁当を買ってきてくれます。」

私 「良かったね。じゃあ、あなたは布団の中にもぐって休んでいればいいんじゃない？」

Aさん「でも最近、夫が『いつまでこの状態が続くの？』って言い始めて…」

私 「そうなのね。でも、あなただって好きでそうなっているわけじゃないよね。あなたの生活の中で、何が一番大変かしら？」

Aさん「3歳の子どものご飯を作るのが大変なんです。」

私 「朝にご飯を多めに炊いて、握り飯を作ってテーブルの上に置いておけばいいのよ。」

Aさん「えっ？ 三度のご飯を作らなくていいんですか？」

私 「人間、動物だからお腹がすけば奪ってでも食べるものよ。命をつなぐために自分で食べるから、そこに置いておけば子どもがお腹がすいた時に勝手に食べるから大丈夫よ。」

Aさん「そうなんですか？」

私 「そうそう。」

Aさん「もう一つ嫌なことがあるんです。」

私 「何かしら？」

Aさん「下の子の離乳食を作るのが嫌なんです。」

私 「離乳食っていうのはね、子どもはまだ歯が生えていなくて咀嚼能力が

無いから、ドロドロした食べやすいものを作ってあげるといことなの。だから、具だくさんの味噌汁を作って、噛んで潰して食べさせちゃえばいいのよ。」

Aさん「それはちょっと汚いのでは…」

私 「あなたも食べているんだから大丈夫よ。」

Aさん「そんなの虫菌菌がうつるから駄目なんです。」

私 「虫菌菌？」

そんな言葉さえ、私の時代にはありませんでした。知り合いの歯医者さんにも確認したところ、確かに虫菌菌はあるけれど、噛んだものをあげるとすぐにうつるということでもなさそうです。私はAさんに、それならスプーンで潰してあげたらと提案しました。それでもAさんは、本で見たようなきれいなものでないと…と気になっていたようです。育児雑誌はとても素敵ですが、現実的ではないこともあります。その理想に縛られて、頭でっかちになってしまいがちなのです。

子どもの食事についても同じで、好き嫌いを気にしすぎたり、保健所での栄養指導を100%守ろうとして疲れてしまったりするのです。専門家の意見として聞いたことや育児雑誌の情報は、あくまで「見本」として捉えるだけに留めておいた方が良いでしょう。

6. 子どもを知らないための不安

先ほどの寝返りなどもそうですが、子どもを知らないための不安がすごく大きいのです。私はたまにEテレの「すくすく子育て」という番組に出ています。何回か前は「子どものウソ」というテーマでした。「お風呂に入りましょう」と言われて、2歳の子が「○○ちゃんが入らないって言っているよ」と言う。「あなたが入りたくないんでしょう。なのに、そういうウソをついてはいけません。ウソをつく子に育てたくないで、ウソをつくつと、えんま様に舌を抜かれるよ」と言う。これはウソだということを認識して、自分を正当化するために、もしくは自分を有利にするために、あえてウソをつくのは5歳ぐらいからだと思っています。2歳には分かりません。

更に、3歳の子が「今日、アンパンマンに会ったんだよ」と言いました。そ



うしたら、そのお母さんが「ウソだ」というわけです。大体、アンパンマンを見たのは事実ですけど、それは昨日だったというのです。3歳に昨日と今日と明日が分かるのでしょうか。その子にしたら、「アンパンマンに会ったんだよ」という、嬉しい気持ちを伝えたくて、「今日ね、アンパンマンに会ったんだよ」と言ったら、「今日じゃなかったでしょう。アンパンマンには昨日会ったんでしょ」と、そんなところでウソかウソでないかなどと頑張る必要は無いと思うのです。口をききはじめてから、私たちと同じ視点、私たちと同じ体験を持っているかのように錯覚を起こしてしまうのです。

あの番組は困っている人が応募してくるので、みんな沈んでいるのです(笑)。「シャンプーをしないと言うんです」。何日経っているのかと聞いたら、たった3日と言うので、「大丈夫よ。死にはしないから」。りんごの木で、真夏に3か月頑張った子がいるからと言ったのです。えっと言うのですが、色々な情報の細部まで気にして、全部その通りにしないと健康な子どもが育たないかのような強迫観念が、育児を暗くしているのです。

「すくすく子育て」から帰る時には、お母さんたちがだんだん明るくなって、玄関で「今日は気持ちが楽になりました。また来ます」と言っています。子育てしている人たちは、「こうあるべき」「こうした方がいい」という大変細かい情報に押しつぶされているような状況で、更にインターネットによる情報過多での混乱と、子どもを知らないために不満や不安を持っていることがすごく多いと思うのです。

「イヤイヤ期をどう過ごせばいいのですか」「イヤイヤ期はいつ終わるのですか」という質問がすごく多いです。「イヤイヤ」というのは1歳ぐらいからあるかもしれないけれど、自分に気付いて、「私、お母さんとは違う人です。あなたの言う通りにはしません。あなたの命令には従いません。私を尊重してよね」という意思表示です。それをあえて言うようになるのは、私は2歳半から3歳ぐらいだと思っています。そうすると、何でも言った途端「イヤ」になって、聞いてもいないのに「イヤ、イヤ」と言います。イヤイヤ期は子どもたちが、『私は私を大事にしたいんです』と叫び続けているのだから、無いより、有った方が良いのです。有って良いことなのだから、聞き流せば良いのです。「今日これを着ようね」と言うと、絶対に「イヤ」と言うので、「これとこれと、どっちにする？」と選ぶ権限を子どもに与えると、子どもはちゃんと「こっち」と

言います。だから大人の工夫しか無いと思うのです。「イヤイヤ期はいつまで続くのですか」というと、一生だと思えます。一生「あなたと私は違う人ですから」と子どもは言い続ける。2～3歳の時は「イヤイヤ」と言っているし、もう少し大きくなると「うるさいな」と言うようになるし、「おまえは私と違うんだよ」と言うようになるし、4年生ぐらいになると、「それはお母さんの考えでしょう」とはっきり言うようになっていきます。だから、「あなたと私は違う人間です」というのは、子どもが一生叫んでいくことなのではないでしょうか。

子どもが成長したら、「ああ、この時期のことね」となります。例えば4歳ぐらいは何でも1番が好きです。「俺一番、俺一番」と言います。「俺一番」って、ご飯を食べるのが早くても自慢にならないよ。そんなケチな人間にならない方がいいんじゃない」と思っていたけれど、5歳、6歳になってくると、「俺一番」ともう言わないのです。一時なのです。子どもを知っていれば一時なのだということが分かるのですが、知らないと親はこれが永遠に続くかのような不安感を持ってしまいます。そこが子育ての苦しみになっていると私は思います。

7. 毎日積み重ねていく信頼関係

これから、保育者と親との信頼関係をどうやって築いていったらいいかという本論に入ります。私がいまず思っているのは、関わらずして信頼関係は生まれない、親との信頼関係は積み重ねていくものであるということです。その積み重ねていく第一歩は、やはり朝の挨拶だと思います。子どもや親に会った時に「おはよう」とにこやかに挨拶をする。マクドナルドになりましょうと言っているわけではないのですが、にこやかに言われることで親はほっとします。りんごの木は、近所の方のご迷惑も考えて、朝と帰りにドライブスルーをやっているのです。帰りは車に乗ってくる人が多いので、親は車から降りないで、ドアを開けて子どもだけを受け取って、それで流れていくようになっています。ちゃんと話したい人は車をどこかのパーキングに入れて来る、もしくは歩いて来るとなっています。

まだ4月の初めの頃、保育者になったばかりの人がとても緊張して硬い顔をしていたのです。そうしたら苦情を言われました。「朝せっかく行ったのに、喜んで迎えてもらえていない、怖い顔をしている」と言うのです。その人に言っ



たら、「えっ、ただ私、緊張しているから、そういう顔になってしまうだけです」。でも、「新しいからしょうがないわね」と思ってくれる優しい親ばかりではないということなのです。だから、「親も、連れてきた時に『おはよう』って言われたら気持ち良いから、ちょっと練習してみたら」と言いました。

もう一人、チサキちゃんという子のお母さんが、まだ入園1週間ほどの時に「りんごの木の安全対策はどうなっているんですか。保育の質が低過ぎる」と苦情を言ってきたのです。まだ1週間か10日ぐらしか経っていないのに、安全対策と保育の質？ と思いました。でも、そういう時は絶対に奥があるので。だから、「ごめんね。まだ大して経っていないのに、そのぐらい失望しちゃったんだよね。どうして、そんなことを思っちゃった？」と聞くと、朝送ってきた時にいつも保育者は他の保護者と話していて、おはようと挨拶されたことが無いとのことでした。実は、その方はご主人の反対を押し切って、りんごの木に子どもを入れたそうです。りんごの木になじんでほしいと思ったから、夫に子どもを送らせたなら、夫に「あんところで大丈夫なのか、挨拶の一つも無い。」と言われたのそうで、実際に一緒について行ってみると、確かに一回も挨拶をされたことが無かったということでした。だから5日間挨拶されたことがないということなのです。

これは完全にこちらがいけないですよ。お母さんに声を掛けられると、「ちょっと待ってね」とはなかなか言えません。ですがこちらが完全に悪いと思って、私は何かがあった時にはなるべく早く対応することが大事だと思っているので、「本当だね。夫が反対だったのに決めてくれたのに、ごめんね。本当に完全にこっちが悪い」と言いました。来てくれたら、ただのおはようではなくて、「〇〇ちゃん、おはよう」が大事です。一人ひとりの子を温かく迎えているという、こちらの空気を流していかないと、やはり親はほっとして置いていけません。だから、「おはよう」というのはすごく大事なことだと思います。その親には本当に悪かったと言って、ご主人にも、「本当にごめんなさい」と、私たちの朝の対応の仕方がまずかったことをおわびして、同時に、朝は長話はやめますという手紙を親に出しました。「朝、保育者は、みんなの子どもを迎え入れたいので、個々の対応は出来ません。だから、話がある場合は迎えに来られた時にして下さい」と公表しました。朝の「おはよう」は意外と大事だと思います。うちの子が大事にされているか、されていないかという

のは、その一言で結構感じてしまいます。

8. 思いは熱いうちに届ける

それから、日常的に心掛けているのは、思いは熱いうちに届けるということです。例えば、2歳のアツ君という子が、初めて来た時にまだあまりしゃべれなかったのですが、私が「おはよう」と抱いたら、「ママ、ママ」と泣くから、ママは後ろ髪を引かれるような思いで帰りました。そういう時に、往々にして大人は、「ママは後で来るから大丈夫よ」と言います。後っていつなのという感じですよ。特に初日だと、私たちは保育をする者だから、子どもを喜んで迎え入れようとします。ですが、子どもにとっては知らないおばちゃん、知らないお姉ちゃんです。だから、「さあ、おいで」と言っても、子どもにとっては、ニヤッとしたやまんばのようなものです。「ママ、ママ」とのけぞるようにすると、「大丈夫、大丈夫」と言いますが、何が大丈夫だか分からない。「ママのことが大好きなんだよね。大好きなママが行っちゃったから悲しいよね」と言ってあげることが、心に寄り添うということなのです。どんなに小さくて、しゃべれなくても、「ママが大好きだったんだよね」と言うのと、「泣かない、泣かない」と言うのでは、圧倒的に泣き方が変わってきます。

「ママが大好きなのに、行っちゃったから苦しいよね」と言うと、「あっち、あっち」と言います。落っこちそうになりながら「あっち、あっち」と言っているのに、仕方がないから、「じゃあ、ママ探しに行く？」と言うと「うん」となります。外に出て、「アツ君、悪いけど、重いから歩いてくれる？」と言うと、「いいよ」。それで歩いていると、道路のところに水が流れてくるので、気をそらせようとして、「お水、お水。面白いね」と言ったら、少しはいいのですが、「あっち」って戻るのです。覚えているのです。ちゃんと角になると曲がります。よく覚えているなど思いながら、私は内心これ以上遠くへ行きたくないと思っています。

その日は雨の翌日で、造成地があってぬかるんでいたのです。私も長靴を履いていたし、アツ君も長靴を履いていたので、「このぐちゃぐちゃ面白いね」と言ったら、アツ君も顔がだんだん生きてきました。「アツ君、どんなリュック持ってきたのかな。リュックの中にお弁当が入っているんだよね？ 見てみたい。りんごの木に行こうか」と言うと、「うん」と言ったので、しめたとあって、手をつなぎながら帰りました。大人は、特に女性は自分の不安を全部言葉



にします。だから、私だけずっとしゃべって、アッ君は何もしゃべっていませんでした。かつて男の保育者だけ好きな子がいました。その子は、朝その人と手をつなぐだけで、泣かないで入ってくるようになりました。その子が大きくなった時に、「ねえ、タイシはどうしてあの先生だけが好きだったの？」と聞いたら、「女はうるさい」（笑）。確かに、ああしろ、こうしろと口数がシャワーのようになってしまうのです。それで、私もそう思いながら、りんごの木に着いたので、「これが、アッ君のリュック？　きれいだね。このリュックなんだね。中にお弁当が入っているのかな」と言ったら、アッ君がお弁当を出して、ふたを開けました。まだ初期の頃だったから、小さなおにぎりにプチトマトに、タコになったウインナーと卵焼きでした。するとアッ君は卵焼きを取り、自分が食べるのではなく私の口に入れてくれたのです。そしてアッ君は、自分は食べないでふたをしました。

更に私の膝に乗ってきて、「おばちゃん」と言ったのです。この卵焼きは、「色々お世話を掛けています。僕、あなたを信用しようかな」という卵焼きだと思うのです。私は本当に胸が一杯になりました。この感動したこと、胸が一杯になったことは、時間とともに整理されてくるとつまらない話になってきます。だから、まだ整理されていなくていいから、「今日ね」というレベルで親に伝えてしまうのです。その日はアッ君はお母さんがお迎えではなく、翌日は休みだったので、私は連絡帳にアッ君の熱い卵焼きを頂きましたという話を、今話したようにわっと書いて、速達で送りました。

そうしたらお母さんが月曜日に来て、「あれを読んだだけで、ここに入れて良かったと思いました」と言ってくれたのです。私たちは日常的に子どもを相手にしていると、「わあ、面白い」とか、「うわ、すごいね。この子、こんなことが出来るようになったね」と、色々な喜びを感じていると思います。その喜びを、その本元の親に伝える。よく保育が終わってから、「今日、〇〇ちゃんがさ」と職員間で保育話をしていませんか。そのことを親にも伝えてあげる、共有するということです。そのように思いは熱いうちに届けるということを心掛けています。

ところが時代が進んで、先日新聞で、保育中の様子をスマホでリアルタイムで親に伝える業者も出てきたと書いてありました。どんどん広がりつつあるそうです。リアルタイムで親に伝える。親も園で何をしているかが分かりやすい。

保育者も連絡帳を書く手間が省けるから楽で好評だと書いてありました。だけど、リアルタイムで子どものことを見ていたら、親だって落ち着かないのではないのでしょうか。「どうしたのかしら」とか色々思います。カメラが設置されていて、親が見たい時にパソコンで見られるという園も多くありました。でも、そうなってしまったら子どもを怒れないのです。だから、カメラの死角に連れていって子どもを怒っていました。

そのスマホのリアルタイムも、保育者は忙しいのに平等であろうとして、「この子、あれをやったっけ？」という余計な気を使わなければなりません。保育者も、「この子の親は神経質だから、これを見たら絶対気にするよな」と思ったり、それぞれの事情も考えなくてはいけません。更に、親と子どもが会った時に、そのリアルタイムを見ていて「今日、絵を描いたのね。もっと大きく書けば良かったのに」となるのです。子どもにしてみたら、そこに居なかったママが何で知っているのと不気味です。母親が亡霊のようにいつも居るみたいで恐ろしいです。

最近では、自分の大事なものを、知らない人を信用して腹をくくって預けるという気持ちが失われている気がします。保育園も幼稚園もそうだけれど、担任を知る前にそこに託す覚悟をするわけです。だから、私は覚悟しないで預けるのはやめて下さいと言ったりします。信じない人にどうして託せるのか。何か知らないけれど縁あってこの人のクラスの子になったのだから、「ここはよろしく願います」と、親も腹をくくって覚悟しなければいけないと思っています。

以前、他の保育園で、子どもがたばこを押し付けられたと怒鳴り込んできたお父さんがいます。それで、その園長は、「うちは、職場でたばこを吸っている人はいません。まして、たばこの火を押し付けてしつけるなどということは絶対あり得ない」と言いました。結果的には、その子が木で引っ掛けて出来た傷だというのが分かったので事なきを得たのです。でも、たばこの火を押し付けるかもしれないと思うようなところに、親はどうして信用して預けるのだと私は思うのです。そんなに不信だったら預けない方がいい。自分が仕事をするために、子どもを集団生活に慣れさせるために、子どもにとって良かれと思って選択したのだったら、そこに親の覚悟が必要だと思うのです。それを何でも見ていなければ安心出来ない、あの先生の様子がカメラで見られれば、スマホ



で見られればというのは違うのではないのでしょうか。

もっと言うと、今、保育園は契約書を交わします。私は契約書で子どもを預かりません、信頼関係で預かります、と拒否をしてやり方を変えています。保育者が最初に、「この子はうちのクラスで引き受ける。この子はうちのクラスの子。縁があって私の子」と覚悟することはもちろんですが、親もそうあってほしい。そして後は関わり合いながら、日々信頼関係を築いていく。信頼関係というのは一気に出来るものではなくて、時間をかけてお互いのことを知りながら、積み重ねていくものだと思います。

かつて、うちでイラストレーターから保育者になった人がいました。その人は、三人以上の大人とは話せませんという人でした。子どもも三人以上は嫌だという人でした。でも、私は面白い人が好きだから、「まあ、いいわよ。来なさい」と言いました。他の保育者は連絡帳やお手紙を書いたりしますが、彼女はみんなのことを平等に見るのがすごく苦手だったので、イラストレーターだったということもあって、毎日保育日誌に絵日記を描いたのです。今日こんなことがあったという絵日記を毎日入り口にぶら下げておいたら、すごく評判になりました。出てくる子は三人ぐらいいかないのだけれど、それに自分の子が全然出てこなくても、保育の楽しさが出ています。だから、お母さんたちもファンになってしまって、「今日は無いんですか」と聞かれるほどでした。

保育者にもそれぞれ癖があります。その癖は良しとして親にも受け止めてもらえると思うのです。毎日絵日記を書くことで、その人は信頼を得て、あの人はすごく保育を楽しんでいるということが伝わります。「あの人は、そつのない保育をする」ではなくて、「あの人は保育を楽しんでいるよね」ということが親の信頼を得ていくのだと思います。そして彼女は大した人で、その毎日付けていた絵日記を本にして売ってしまっているのです。

9. トラブルが起きた時の対処

次は、けがやトラブルが起きた時です。多少のけがはいいと言うけれど、いざけがをしている我が子を見ると、親は穏やかではられません。私は一緒に行かなかったのですが、3歳児を公園に連れていった時のことです。鎖を登っていくジャングルジムのような遊具があって、そこにコタロウとタッチちゃんという子が登って怪獣ごっこをしました。コタロウがタッチちゃんを押してしまっ

て、タッチちゃんが落ちて、落ちたところにたまたま金具があり、頭にけがをしました。

その時私はりんごの木にいたのですが、保育者から電話があって、「大変です、大変です。タッチちゃんが頭にけがをしました」と言うのです。「どうしましょう、救急車呼びますか？」と言うので、「ちょっと待っていなさい、近いから私が行く」と駆け付けると、タッチちゃんは頭を少し切っていました。それで、「これは大丈夫よ」と言って、私の車で病院へ連れていきました。

それが金曜日だったと思うのですが、タッチちゃんのお母さんに来てもらって、けがをした経緯を報告しました。それと同時に、私はコタロウの家にも連絡をしました。それは、おたくの子が押してこんなことになってしまったという報告ではないのです。「今日こういうことがあったの。今、コタロウはとってもドキドキしていると思う。自覚していないけれど、そこで怪獣ごっこをやって押ししてしまったから、タッチちゃんがけがをしてしまった。大好きな友達のタッチちゃんから血が出た、きつものすごいショックを受けていると思うので、コタロウの気持ちのフォローをお願いします。今怒るのはやめてほしい」と、お母さんに伝えたのです。帰ってきた時から何か様子が変わったと言うから、「タッチちゃんがけがしちゃったんだよね、ドキドキしちゃったね」と、コタロウを責めるのではなく、コタロウの心のケアをしてほしいと言ったのです。

その次の日に、お父さんのいるところに、その担任と私は一緒に謝りに行きました。でも、このように何か事件があった時に、ただ「けがをさせてごめんなさい」という一辺倒な謝り方は、私は飾りでしかないと思うのです。よくテレビで、「申し訳ありませんでした」とか「深く心からおわびします」と言いますが、あれはおわびしていると思えますか。形上、頭を下げていることなんて、人の心には伝わらないと思うのです。その時にまずやることは、どうしてけがが起きたのかと一つ一つを検証してみることです。

タッチちゃんのけがの場合は、最初にコタロウとタッチちゃんが遊具に登っているのは知っていたかと保育者に聞いたら、知っていたと言いました。次に、コタロウとタッチちゃんが遊具の上で怪獣ごっこを始めることは想定出来たかと聞いたら、怪獣ごっこが大好きなのは知っていたから想定出来たと言いました。タッチちゃんが遊具から落ちた時、保育者は何をしていたか。見ていなかった。広場の方で他の子どもたちと遊んでいた。その時に、けがを防ぐにはどうすれ



ば良かったかと保育者に聞きました。そうしたら、怪獣ごっこを始めた時にストップをかければ良かった。もしくは、その場を離れるべきではなかったと担任の口から出てきました。

ここなのです。「けがをさせてごめんなさい」ではなくて、このぐらい細かく。ジャングルジムに乗っていたのは知っていたのです。そして、二人が集まるといつも怪獣ごっこをすることも知っていたのです。だけど、そこで目を離してしまった。それから、みんなの遊んでいるところに行ってしまった。「そこが私たちの大きな過ちでした」と、どこが良くなかったのかを細かく具体的に言ってこそ、おわびになると思うのです。

例えば、山のとっぺんから芝生までゴロゴロと転がって、骨折してしまった子がいます。この場合は私は謝りません。だって上からゴロゴロ転がるのは他の子もやっているわけだから、その子が骨折してしまったのは、肘のつき方が悪かったか何かで、私のせいではないです。あそこで転がらせなければ良かったという話ではないと思うのです。だから、この場合は事故です。「痛い思いをさせてかわいそうだったとは思いうよ。でも、大きなけがでなくて良かったね、痛がっているのを見ると切ないよね」という共感はしますが、「申し訳ありませんでした」は言いません。一つのことがあった時に、検証してみて、どこに自分たちのミスがあったかが明確になってこそ、謝って納得していただけるのではないかと思うのです。

タッチャンの家に保育者と謝りに行った時に、同居だったのでおじいちゃん、おばあちゃんも全部居られて、そこにコタロウもお母さんと一緒に来たのです。「昨日コタロウがずっと辛そうだったから『ドキドキしちゃったんだよね』と言ったら、コタロウが『タッチャンに謝りたい』と言ったので、今日来ました」と言って、コタロウは3歳だけれど、「タッチャン、ごめんね」と言ったのです。そうして何も無かったように二人は仲良く遊んでいました。

かつて、こんなこともありました。それも私が同行していなかったのですが、公園へ遊びに行った時に大きな石の上に3歳の子がたくさん乗ったら、一人の子が落ちてしまったのです。それで歯茎を打って、少し血が出ました。でも、「あっ、落ちこちっちゃったね」と言って、止血したら血は止まって、その後、その子はお弁当の唐揚げもおいしそうに平らげたのです。だから、打ったみたいだけれど、大丈夫だと保育者が判断したわけです。それでお母さんが迎えに

来た時に、「実はこういうことがありました。今日は木曜日で、りんごの木を知っているところはお休みなので、もし気になるようだったら歯科医に行ってください」と、いったん帰りました。それで、お母さんが大きな病院の口腔外科に行ったところ、歯茎には歯の上にイカのような薄い骨があるそうで、その骨が骨折していることがわかりました。でも、血も出ないし分からないわけです。口腔外科だったから分かったのです。その薄い骨が骨折したから、そこにアルミホイルのようなギブスをはめました。お母さんは驚くほどカンカンに怒って、「どうしてあの時救急車を呼ばなかったか」と言いました。でも、担任としてみたら、血も止まったし、ご飯も食べていたので、救急車を呼ぶほどのけがとは思わなかったのです。だけど、何があるのか分からないのに私がそう言って帰したということで、カンカンになっているのです。

そのお母さんは、色々なことを抱えていて、私によく相談に来る人でした。だから私は彼女の心のケアをしてきました。ところが、今度は私が加害者になってしまったのです。彼女は私に色々訴えて、「もう担任は信用出来ない」と言いました。そうしたら、その子の担任だった二人の保育者は、「あそこはお兄ちゃんが受験だし、お父さんが単身赴任でいないから、あのお母さんがイライラして、こんなに怒っているのです」と言ったのです。私は、「その人が抱えている事情を、あなたたちが逃れる言い訳に使ってはいけない」と言いました。

でも、何であんなに怒ったのか。そしてもちろん、子どもをりんごの木に來させなくなりました。私はどうしたらいいのかなと思って、まず毎日その家に通いました。会ってくれる時もあつたし、会ってくれない時もあつたし、色々なことがあつたけれど、とにかく毎日玄関に行きました。その子は毎日口腔外科に行って消毒をするので、「私にそれを手伝わせて」と言いました。そしてお母さんと一緒に車で口腔外科に行ったのです。待合室の時はまだいいのだけれど、入った途端にその子は大泣きしました。「お母さん、私に任せて下さい。お母さんはここに座っていて」と言って診察室に入ったら、そこは若い歯医者さんで、脅していたのです。泣くと治療出来ないから、「ネットだぞ」と言うのです。動かないようにネットをぐるぐる巻きにして治療するのを見たことありますか。バスタオルで動けなくするところもありますが、バレーボールに使うようなネットでぐるぐる巻きにして動けなくして治療するのです。歯医者さんがそうやって脅すので、もっと泣くのです。



私は、「そのネットがいけないのです。そのネットが怖くて泣くのですから、ネットは言わないで下さい。私が押さえるから、ネットは絶対にしないで下さい」と言って、子どもに「私がちゃんと見ているから大丈夫だよ」と言ったら、その子は泣きやみました。でもその時に、この泣き叫ぶ声にお母さんは一人で耐えていたのだと思ったのです。その時にお母さんの怒りが分かりました。我が子が泣き叫んでいるのを、誰にも頼ることも出来なくて、一人で抱えなければならなかった、親としてはやはりそれが一番辛い。こんなに彼女が怒っている、元の種はここにあったのではないかと私は思いました。泣き叫ぶのを一人で「大丈夫、大丈夫」と押さえる、多分一緒に泣いていただろうと思います。起きてしまった事故は事故なのだけれど、この人がこんなに怒る元の種はどこにあるだろうというのは、私は一緒に行動してみて、そこで探り当てた気がしました。

その時に、「お母さん、こんなに泣き叫ぶわが子を毎日見なくてならないのは、辛かったね、耐えられなかったね。ごめんね」と、初めて本当に「ごめんね」と私は思いました。そして、それからは私が病院に連れていくようにするからと言って、私が連れていくようにしました。その後けがは治ったのですが、その子は大勢で乗った石から落ちたために、今度は大勢の子どもを見ると怯えるようになったのです。大勢を見ると萎縮してしまうので、戻れなくなっているのです。だから、休みの日や子どもが帰った後に1対1から始めました。私とその子が遊ぶ。その次に、その子が大好きな友達と一緒に遊ぶ。二人、三人と増やして行って、数か月後には元のクラスに戻れました。その後、4歳でどうするかと思ったら、お母さんは、「やっぱり、ここがいい」と言ってくれました。その子が5歳の時、私がちょっと入院することがあったのですが、その時に、そのお母さんが他のお母さんたちに声を掛けて、お見舞いのパジャマをプレゼントしてくれたのです。だから私は間違っていなかったと思いました。

怒りにはやはり、どこでその怒りに火が付いたかという種があると思うのです。その種を探っていくということです。クレームをよく言いにくる人がいますが、そのクレームもどこかに種があると思うのです。うちに自閉症と言われているハル君が来ました。ハル君は4歳で言葉を持っていませんでした。療育センター2日とりんごの木3日を併用していて、秋に運動会がありました。みんなと一緒にいるのが好きなハル君も参加していましたが、みんなが玉入れなどをしている時にハル君は砂をほじっているだけだったので、運動会が終わっ



た後に両親がすごく怒ってきました。知能は高いので、「うちの子は出来る能力があるのに、放っておかれたから玉一つ投げなかった」と言います。運動会は自分の子しか見ていないのです。私たちは、一緒にいて砂をいじって喜んでいたので良いのではないかと思っていたのですが、「やり方をきちんと教えれば出来たはずです」と言うのです。

その親は二人とも賢いから、りんごの木に対する不満を簡条書きのレポートにして持ってきました。「たくさんあったのですね。では拝見します。時間を作りますので、ご両親の都合の良い時に来て下さい」と言ったら、夫は来られなかったのですが、妻が時間を取ってくれました。そして、「私一人の対応がいいですか。それとも担任している者も一緒の方が良いですか」と聞くと、「担任している人も一緒に来て下さい」ということでした。それで時間を取って話したら、どうも全ての不信感は、元をたどると自分を拒否されたということにあると思いました。その人は自閉症の子どもが3歳の時、コミュニケーションを取るために絵カードを作っていました。それも抽象的なのではなくて、写真を撮ってカードにしたものでした。「今度はこれをしようね」というのを、子どもが視覚で分かるように作っていました。

ところが、そのカードをりんごの木でも使ってくれますか、もしくは作ってくれますかと聞いた時に、簡単に担任が「あ、結構です」と言ってしまったらしいのです。どうやらそこだなと思いました。お母さんに「あなた、絵カードで子どもとコミュニケーションしているんだよね。ちょっとそれ見せてくれる？」と言って見せてもらうと、辞書みたいなのです。その子の全ての行動を辞書みたいにして作ってあるわけです。すごい労力ですよ。親が子どもに良かれと思って努力していることを、「あっ、結構です」と一笑に付されたことは、やはりカチンときたのだと思います。自分の子どもが自閉症であることをそのまま受け止めよう、受け止めようと思っている時に、そこに共感してあげなかったからだなと思いました。

私は「すごいわね。こうやって育ててきたの？ この絵カードって、効果があるの？」と聞いたら、「あるんです。このカードのおかげで、私は子どもとコミュニケーションが取れるようになったんです」と言うから、「そうなのね。でも、こんな大変なもの私には作れないわ。じゃありんごの木で使ってみるから、お母さん、作ってくれる？」と聞くと、「いいですよ」と喜んだのです。



自分のやり方を受け止められたということですよ。それで作ってきてくれました。ところが、肝心のハル君が、「ハル君」と言っていると、それを開けようとすると、嫌がるようになってしまいました。それは置いておくだけで、そのうちハル君はどんどんしゃべるようになりました。

だから、たったこれだけの種、自分が否定された、そのことが全ての不満につながっていってしまう。大体そうですね。「この人良い人だな」と思うと、その人の癖でも何でも全部良いような気がするのです。ところが、一つ不信感があると、その人の全部が不信になる。やはり人間ってそんなものだと思うのです。「この辺は信じられるけれど、この辺は信じられない」と一人の人間を分析して関係を築いていく人はあまりなくて、やはり受け止めてもらえているか、もらえていないかです。先ほどの「おはよう」もそうです。そして、それは私たちにはなかなか見えなかったり、隠れた種であったりすることがよくあると思います。このように、どこの時点で親がこのようになったかというのを探っていくと、その後、とても良い関係になれると思います。「このカード、私にも作ってくれる？」と言ったところから、そのレポートは全部引込められました。それで運動会のことは話にも出なくなったのです。更に、ハル君がどんどんしゃべるようになったということもあって、療育センターをやめて、全部うち一辺倒になったのです。今なんて「りんごの木は良い」と、そのお母さんがあちこちに宣伝しています。そのぐらい気持ちは変わっていくということです。

10. 子どもが親を変える

もう一つ、親が話すことを、正しいか間違っているかという評価はしません。私たちはどうしても正しいものを求めてしまい、そして、親にもそうあってほしいと思います。

かつてこういうことがありました。子どもは目覚めてから4時間後ぐらいが一番集中力を発揮出来るということで、保育で10時頃に集中してほしい課題を作るから、逆算して6時に子どもを起こして下さいとした保育園があります。6時に子どもを起こすと、ちょうど10時ぐらいに良い活動が出来るということですが、それは大きな問題になりました。家庭生活までも保育園が立ち入ってくるのは違うと思うのです。私たちが良かれと思うことは、必ずしも親が良か

れと思うことではないのです。

例えば、ユミちゃんという3歳の子が、来るのがいつも遅くて、10時か10時半ぐらいになるのです。ユミちゃんはぼうっとして抱かれて来ます。しばらくお母さんが抱いていて、そろそろいいかなと思う頃に、ユミちゃん自身から「愛子先生」と声が掛かる。そうすると私が「ユミちゃん、おはよう」と言って抱く。それから1日が始まるという子でした。どうしてこんなに遅くなってしまうのか。「朝ゆっくりだよね」と言うと、「お父さんの仕事が遅いものだから、11時ぐらいになって帰ってきたりするのです。そこから子どもと遊ぶので、いつも寝るのが遅くなってしまっ」とお母さんが言うのです。「ああ、そうなのね。お父さんと顔を合わせたいものね」と私は言いました。家ではやはりお父さんと顔を合わせることが大事なのです。こっちは遅刻しないで来てくれることが大事なのです。でも、どちらを優先するかというと、やはり私は家だと思っているのです。だから、「まあ、しょうがないね、ゆっくりで。そのうち何とかなるわよ」という言い方をしています。

ユミちゃんの友達のカイちゃんとトモちゃんは、ユミちゃんと遊びたくて遊びたくて待っていて、ユミちゃんが来ると、「来たよ。来たよ」と言うけれど、いきなり「ユミちゃん」と声を掛けません。ユミちゃんがぼうっとして、「愛子先生」と言って、「ユミちゃん、おはよう」と言ったところからユミちゃんが起きはじめることを承知しているから、その二人の子は、もうすぐだよ、と待っていて、ユミちゃんが「愛子先生」と言ったら、「ユミちゃん、遊ぼう」と来るのです。このように子どもは、その子のスタイル、その子のそのまを受け止めています。でも私たちは、どうあってほしいというのがあって、摩擦になってしまうことがあると思います。

私はその時にいいやと思ったのは、りんごの木が楽しくなったら、ユミちゃんは絶対に「もっと早く行きたい」と言うようになると思ったからです。子どもが親を変えていくのだと思います。「遠足に行くから、明日は〇時までに来てほしいな」と言ったら、ユミちゃんが「みんなと一緒に行きたい」と言いますよね。子どもの気持ちがそのように向いてこそ、親はそこに引っ張られて変わる可能性がある。私たちが言って変わるよりも、子どもが親を変えていく力の方があろうと思います。正しい、正しくないという評価はやめましょうということです。



ある時、こういう質問がありました。「買い物に行くたびに、子どもに100円ぐらいのおもちゃを買ってあげるのですが、どうやったらやめられるのですか?」「行くたびに買ってあげるの?」「そうなのですよ」「それをやめようと思っているの?」「だって、いけないんでしょう?」「誰がいけないって?」「偉い先生たちが」「偉い先生たちの子じゃないから、いいじゃない。あなたはどのように買ってあげるの?」「だって、『買って』って言われて、買ってあげるといい顔するんだもん」「ああ、そうなの。じゃあ100円って笑顔の代金だね。私は1回に100円なんて使っていたら、塵も積もればで無駄金だと思うから、やらないわよ。だけどあなたが、『この笑顔が100円でもらえるなら安いもんよ』と思えるのだったら、いいんじゃない、あなたのお金だから」。

偉い先生がというのは、何の根拠にもなりません。結局、自分が毎日買ってあげるうちに、だんだん高いものになってきて、「こんなの買ってあげるのは嫌だ」と思う時がきつときます。子どももだんだん当たり前になって、いい笑顔を見せなくなったりとする時に、その人自身が買ってあげたくないと思う時が来ると思います。言われてどうこうするということは、人間にはなかなか難しい。実感して変わっていくのだと思います。だから、先ほど子どもが親を変えろと言ったけれども、それは親が一番実感しやすいからだと思います。実感して変わっていくので、偉そうに言っても仕方ないことが多いと思います。

私が幼稚園に入って2年目になった時に個人面談がありました。その時はまだ若く、親より優位な立場になるためには偉そうなことを言わなくては行けないと頑張っていました。協調性、社会性、集中力という言葉を使うと専門家っぽい雰囲気が出ると思ったのです。それで、4歳のカヨちゃんという子のお母さんが来た時に、「カヨちゃんは、何でも出来る立派な子ですよ。でも、人の気持ちはなかなか分からないみたい。もうちょっと協調性があるといいですね」と言ってしまったのです。次の日から来なくなってしまいました。園長に、「うちの子は、愛子先生の手には負えないらしいから、先生を変えて下さい。もしくは柴田先生を辞めさせて下さい」と言ったというのです。こんなことになってしまうなんて、私、ただそれを言っただけなのに。でも、そこに「カヨちゃんて楽しいよね。何でも頑張っていていい子だよ」というカヨちゃんを肯定している言葉はありませんでした。親は褒められるよりも、自分の子の欠けているところを指摘されたいと思っていると思ってしまったのです。その方が

先生っぽいので、「こういうところは良いところですよ」ということよりも、「こういうところがちょっと足りませんよね」と言った方がいいような気がしていたのです。

これは大変だということで、カヨちゃんのところに謝りに行きました。「ごめんなさい。私はカヨちゃんもクラスの一人としてとても大事に思っている。だから、カヨちゃんに来てほしいと思っている。カヨちゃんに注文をつけるような口をきいて失礼しました」と謝りました。カヨちゃんは受験するために朝、塾へ行ってから来るのです。疲れているカヨちゃんを見て、これはどうかかなというお母さんに対する私の不信感があったから、なおのこと肯定的な言葉が少なかったのだと思うのです。でも、偉そうに言うとは大変なことになるということを学習した気がしました。

11. 親の信頼感を得る

最後に、親の信頼感を得るために私たちが一番出来ることは、親を保育のドラマや「子どもってすごいでしょ」という子どもの面白さに巻き込んでいくということだと思います。うちは障がいのある子がたくさんいます。今ではそれが当たり前だと思っているので、親からの反対は全くないのですが、最初に私が幼稚園で自閉症の子を預かった時に、親からの反対がありました。「こんな子が入ったらうちの子が見てもらえない、うちの子の手が省かれる」と言われた時に、「いや、この子はこんな風に面白いんです。私はこの子も含めて、私のクラスだと思っています」という手紙をずっと出し続けました。そして懇談会のたびに、そのタロウちゃんがこうでああでと話していたら、秋頃にはお母さんたちが、「好きにして下さい。もう任せます」と言ってくれました。

その話はさておいて、チッチという発達障がいの子がいました。3歳でまだ歩けなくて、4歳ぐらいから歩くようになりました。うちは運動会の時に、4歳、5歳は、自分たちの競技を自分たちで決めます。必ずあるのはリレーです。かけこはずっとありません。リレーはみんなが好きなのです。4歳、5歳は35人ずつで、合わせて70人です。二チームに分かれて、その二チームは保育上も分かれている縦割りなのですが、それでリレーをやりました。赤組と青組だったのですが、練習で赤組が毎回5～6周負けるのです。5～6周も負けると闘争心が無くなりますよね。運動会3日前に私が見に行くと、赤組がまた負けて



いました。「赤はいつも負けていて、嫌じゃないの?」「嫌だよ」「どうして何回やってもこうやって負け続けているわけ?」「チッチがいるから」。チッチは走るの好きなだけけれど、あらぬ方向に行くか、途中で座ってしまうのです。そうすると、その子は頑固者でなかなか立ちません。「チッチがいるから」と言う子に私は、「じゃあチッチを出さなきゃいいじゃん」とあえて言いました。「そんなことを言ったら、チッチが可哀想じゃん」「可哀想じゃないよ。走りたいた人を走らせるのはいいよ。だけど、走りたくない人を走らせるのは可哀想なことなんじゃない?」「そんなの聞いてみないと分からないじゃん」「じゃあ、聞いてみればいいじゃん」。チッチのことを大好きなハルナという子が、「じゃあ私が聞いてみる」と言って、チッチのところへ行行って、「チッチ、リレー出る?」と言うと「出る」と言いました。「ほら、出るって言ったじゃん」と言うから、「今度は出ない?って聞いてみな」と言ったのです。大抵子どもは最初に聞いたことで返すではないですか。「チッチ、リレー出ない?」と聞いたら、チッチが出るという意思表示をしたのです。「ほら、出るって言っているじゃん」と言うから、「ああ、チッチは出たいのか。じゃあ、チッチ、ちゃんとやってもらわなくちゃね。練習してみようよ」と言いました。

みんなが並んでいる時にチッチが座っているから、「チッチ、出るって言ったよね。自分で出るって決めたよね」と言ったら、チッチは嫌そうな顔をして、もそもそと立って行きました。そんなことがあって、チッチは長く待てないから、4番目ぐらいにすることになりました。子どもたちが色々考えてやった結果、私もすごく感動したのですが、当日、チッチは笑顔で走ったのです。チッチはあらぬ方向へ行ってしまうけれど、引っ張られるのは嫌いです。だから、あらぬ方向側に一人が立つわけです。ハルナはチッチが大好きだから、ハルナはチッチと手をつなぎます。押すと絶対にしゃがむので、適当な距離を保って後ろにガードが付きます。三人がチッチを適当に囲んで、そしてチッチに「チッチ、楽しいね」と声を掛け続けて、チッチは初めてノンストップで笑顔で1周走って、初めて赤組が勝ったのです。青組は本当に泣きました。

その時私はその光景を見ながら、協調性とは、誰かのために我慢する、誰かのために誰かが犠牲になるということではなくて、お互いに尊重し合うことなのだと思ったのです。チッチは無理やり引っ張ったら駄目だということは分かっている。そして、チッチを尊重した補助の仕方をしたわけです。子どもは

すごいです。その時私は感動して泣いたのですが、親も感動して泣いていました。うちは運動会の次の次の日ぐらいに親の会をやります。運動会の当日しか親は見ませんが、その背景にはたくさんのドラマが隠れています。チッチのこともそうだけれど、やらなかった子がやるようになったり、色々なドラマがありますよね。そのドラマがまだ熱いうちに、親たちに集まってもらって話すのです。

その時に、「チッチのお母さん、あの姿を見てどうでしたか。一言お話ししたい」と言うと、「私は、今までうちの子は、保育者には大事にされていると思ってきました。でも、子どもたちにも大事にされているのを見て、とても嬉しかったです」と話しました。そのように、ダウン症の子も自閉症の子も、その子がいるからこそ育つ部分を親たちにどんどんアピールしていく。初めて負けた方のチームのアイコちゃんという勝気な女の子が、次の日に自分で電話をかけてきて「悔しくて行けません」と休んだのです。その子のお母さんは、「負けて良かったよ。だって、うちはずっと勝っていたから、中身がスカスカでした。でもあっちのチームは負けてばかりいたから、みんなで色々考えて、中身が詰まっています。このまま勝っていたら、うちのチームはずっとスカスカでした。最後に負けたのが良かった」と言ってくれました。親も育っているなと思ったのです。

保育の中で、こんなに面白い、子どもってすごいですよということを話していくと、親たちは悔しいと言います。家では絶対に見られない姿だから。「家では見られない姿を保育者って見れるんだね」「そうだよ、そうだよ」とよく言います。結局のところ、私たちがどのように保育に情熱を向けているか。そして、子どもたちをどんなに大事にしているかという日々のささやかな思いから信頼関係が出来ていく。そして、子どものこっちは手は保育者、こっちは手は親、両方で育てていこうね。どちらかが前に行き過ぎると子どもは裂けてしまうよと、歩調を合わせながら進む。私たちは家でその子を知る由もない。親は保育の現場の姿を知る由もない。その時に「どうですか？」と声を掛け合いながら子どもと一緒に歩んでいけたらいいですねと思っていますし、言っています。

私の仕事の信条は、保育には情熱、親には誠意、子どもには愛情です。この三つの柱をいつも掲げています。最終的には親には誠意以外ないと思っています



す。保育者の仕事の一つは、30年後でもいいから、子どもに「うちの子で良かった、うちに生まれて良かった」と思ってもらえるように手助けすることだと思っています。親は唯一取り替えられない存在だからです。私たちは取り替えられます。でも、親子の絆は取り替えがきかないのです。その親子の絆、「うちの親で良かった」「うちの子で良かった」と思ってもらえることが、人にとっての大きな幸せにつながると思います。いくつになっても親の愛情がもらえないとずっと悩んでいる人がたくさんいます。保育という仕事は、もしかしたら最終的にそこに結び付かなくてはいけないのではないかと考えています。そして、つくづく自分にも言い聞かせていますが、保護者は敵ではありません。自分から心を開かずして人の心は開かれないのです。そして、それには月日がかかると思っています。

様々なことがあるけれど、最終的には子どもの幸せにつながるとういなおもいます。保護者も色々抱えています。その背景を話してもらえらるぐらいの信頼関係を築くことが出来れば大丈夫だと思います。表面だけでは分からない荷物を親も背負っているのだらうなと思ひながら付き合っただけだと良いと思ひます。